

**世界トップレベル研究拠点プログラム（WPIプログラム）
平成19年度拠点構想進捗状況に対するコメント
世界トップレベル研究拠点プログラム委員会**

世界トップレベル研究拠点プログラム委員会は、平成19年度における拠点構想の進捗状況に対して、以下のようにコメントします。

ホスト機関名	東北大学	ホスト機関長名	井上 明久
拠 点 名	原子分子材料科学高等研究機構（AIMR）	拠 点 長 名	山本 嘉則

1. 進捗状況全般に関する認識

- 短期間にもかかわらず、東北大学原子分子材料科学高等研究機構（AIMR）はそれぞれ固有の歴史、スタイル、技術及び課題を有する四つの研究グループを立ち上げることに成功し、五つの既存学問領域（化学、材料科学、電子工学・情報学、精密・機械工学、物理学）を融合することを目指している。国際化に関して明確な焦点が当てられており、また、研究者に対して過度の事務的負担を与えず、研究に集中できるような手法が導入されており、現時点では順調に進捗している。新たに参加したメンバーの士気は十分高く、すばらしい研究成果の達成が期待される。「応用研究」志向の課題も印象的である。インフラを含めたサポートシステム（スペース、建物、事務及び支援メンバー）を構築するための取り組みも進展中である。
- 主任研究者（チームヘッド）をも兼ねるホスト機関長による支援システムはユニークであり、評価できる。このようなトップダウンマネジメントは、WPI プログラムのような特定のミッションをもったプロジェクト遂行のためには正しい選択であろう。（良い形の大学参画）
- しかしながら、五つの既存領域を統合し、全く新しい形の融合科学をつくりあげるといった課題の進展は遅れている。この課題は、他の課題のどれよりも優先されるべきである。拠点長はこの使命に挑戦すべく、研究者間の日々のコミュニケーションと助言を通じて、すぐに活動にとりかかっていたきたい。
- AIMR は、幸先よくスタートしているが、何か以前に行われていたことと全く違ったことをやろうとしているようには見えない。進捗状況報告書には非常に幅広い課題が記載されているが、進展具合を確認するための具体的な中期目標の設定が望まれる。

2. 改善すべき事項

- 1 五つの既存領域の融合がどのように、達成されるのか明確でない。拠点長はその具体的な方策について明確にしてほしい。高いレベルでの物質・材料研究のゴール設定が望まれる。
- 2 新たに作られたインテグレーションラボは融合科学をつくるための「るつぼ」にならなければならない。これに関連して、四つの研究グループのできるだけ多くの研究者たちがこの建物内で一緒に研究することが必要である。
- 3 AIMRは、新しいマネジメントシステム、トラディショナルでない事務システムについて、さらなる検討が必要である。より明確な賃金体系、若手研究者に対する独立性と雑務の低減は重要である。優れていて、しかもより革新的なマネジメントが必要である。
- 4 AIMRをより明確に「目に見える」ようにする努力が見えない。拠点長はそのための戦略を明確にし、国内外のニューズレターやweb page を含めた、あらゆる工夫をしてほしい。
- 5 意思決定に上部の研究者のみ関与できる組織となっているが、そこには、若手研究者が新しい事にトライするためのチャンネルが必要である。同様に、海外のサテライト機関の研究者と若手研究者の交流の場も必要である。

3. その他の指摘事項及び意見

その他プログラム委員から下記のような意見がありました。

- 1 10年というプログラムの期間を考えると、拠点長はより多くの外国人や女性研究者、主任研究者を採用するため、着実な努力が必要である。
- 2 研究課題、拠点のメンバー及び研究目的について、金属材料研究所と重複を極力なくすることが拠点の存在を明確にするだろう。
- 3 進捗状況報告書に記載されているが、ホスト機関長（運営会議メンバーの4人のうちの1人であり、主任

研究者の1人でもある)は拠点の運営の独立性を保つため、最大限努めるべきだ。

4 他の機関とのより多くの連携が求められる。